

由として、必要な投薬を受けられない低所得国の人々が罹患する感染症に対する薬物の発見及び開発には、「市場原理」が欠如している、ということがあります。つまり、先進国において十分な利益を期待できる分野、例えばオンコロジー領域、生活習慣病領域等と比較し、途上国感染症に向けた創薬では最終的な利益が望めないため、製薬企業が研究開発を進めにくいと言えます。過去10年で新たに開発された薬剤のうち、低所得国を中心に蔓延する感染症(neglected disease)を対象にしているものは、わずか1%に過ぎないというデータは、まさに世界が直面するこの問題を表していると言えます。

博士課程への道、研究課題

私自身、このようなグローバルヘルス分野における課題にどのように立ち向かっていくのか、特に日本がどのように関わっていくべきかということに興味があり、国立国際医療研究センターでの臨床経験後、ジョンズホプキンス大学にて公衆衛生を学び、その後世界銀行を経て現在、公益社団法人グローバルヘルス技術振興基金(GHIT Fund)という感染症に対する創薬を推進する日本初の官民パートナーシップ機関にて勤務しています。途上国を中心に蔓延する感染症に対する新たな治療薬やワクチン、診断薬の研究開発を促進するという観点から、グローバルヘルス分野の製品開発における、イノベーションの促進に向けた戦略・政策の策定には何が必要とされるのか、更に理解を深めたいと思い、大学院進学を志しました。現在、London School of Hygiene and Tropical Medicine (ロンドン大学衛生熱帯医学大学院)および長崎大学による博士プログラム (Joint PhD Programme in Global Health) に在籍し、グローバルヘルス製品開発分野における障壁を同定し、低所得国における感染症の負担に取り組むために必要な戦略を検討すべく、研究を進めています。具体的には、量的・質的分析により、グローバルヘルス研究開発の障壁を特定し、それら課題の解決に向けた戦略と実行可能な方策を検討しています。



(マラリア新規治療薬・臨床試験が行われるペルー、アマゾン川を下る船の乗り場)



(ペルーにて研究者の方々と共に)